

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月5日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25380149

研究課題名(和文) 戦後日本の保守主義の政治史的分析 自民党結成から現在まで

研究課題名(英文) The Liberal Democratic Party and its conservatism in postwar Japan

研究代表者

中北 浩爾 (NAKAKITA, KOJI)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：30272412

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：最大の研究成果は二冊の単著を執筆し、出版したことである。一つは、1955年の結成から現在に至る自民党の歴史を組織とイデオロギーの両面で論じた『自民党政治の変容』である。同書は、自民党が党近代化の時代から、日本型多元主義を経て、新自由主義と右傾化の時代へと変化していった歴史的な経緯、およびその背景について詳細に分析したものである。

もう一つは、自民党の現状について、派閥、ポスト配分、政策決定、国政選挙、友好団体、地方組織といった側面から分析した『自民党「一強」の実像』である。この本では、イデオロギー分析にとどまらない包括的な自民党に関する研究を行ったが、理念についても組織との関連で論じた。

研究成果の概要(英文)： I wrote two books and published them. One is the "The Transformation of the LDP Politics," dealing with the history of the LDP organization and ideology from 1955 to the present. The other is the "The LDP" which analyzes various aspects of the LDP, such as factions, post allocation, policy decision-making, national elections, friendship organizations and local organizations.

研究分野：政治学

キーワード：日本政治史 保守主義 戦後

1. 研究開始当初の背景

本研究は二つの研究領域のなかに位置づけられる。

第1に戦後日本政治史研究である。戦後日本政治史研究は、占領期を除くと、もっぱら外交史の領域で精力的に進められてきたといえる。それに対して内政史、とりわけ政党政治史については、拙著『一九五五年体制の成立』などを例外として、あまり研究が行われてこなかった。近年、福永文夫『大平正芳』（中公新書、2008年）、下村太一『田中角栄と自民党政治』（有志舎、2011年）といった重要な業績が発表されているが、ある特定の政治家に分析対象が絞られている。本研究は、自民党の政治イデオロギーとしての保守主義に着目することで、幅広い視野から戦後日本政治史を再解釈するものである。

本研究に類似した研究が存在しないわけではない。大嶽秀夫教授の『戦後日本のイデオロギー対立』および『自由主義的改革の時代』である。ところが、これらの研究書は、自民党の政治イデオロギーとその変化を包括的に分析するものではない。また、1980年代の行政改革や教育改革を（新）自由主義的改革と規定する点でも、本研究と異なる。この点は、下記の第2の研究上の位置づけにも関わってくる。

第2に現代日本政治研究である。この10年来、ポピュリズムと呼ばれる現象が政治学で注目を集めている。一人の指導者と一般大衆が直接結合するポピュリズムの背後には、既得権集団と目された中間団体に対する批判、そして中間団体の衰退が存在することが、しばしば指摘される。こうした民主主義におけるトクヴィルの契機喪失をアメリカについて分析したのは、シーダ・スコッチポルの『失われた民主主義 Diminished Democracy』であった。日本に即して言えば、集団主義的な日本型多元主義の後退が、この問題を解く鍵を握っていると考えられるが、その分析は皆無である。本研究は、中間団体の衰退という関心に基づき、戦後日本の保守主義を分析することで、現代日本政治の歴史的前提を明らかにするものである。

研究代表者は、戦後日本の政党政治史を研究し、これまで著書『経済復興と戦後政治』（東京大学出版会、1998年）、『一九五五年体制の成立』（東京大学出版会、2002年）などを発表してきた。また、『現代日本の政党デモクラシー』（岩波書店、2012年）では、1994年の政治改革以降の政党政治の変容について分析を行った。本研究は、自民党の政治イデオロギーとしての保守主義という観点から、以上の歴史研究と現状分析をつなぎ合わせつつ、包括的に日本政治を明らかにしようとするものである。

さらに、すでに本研究の土台となる論文をいくつか発表していた。「日本型多元主義の時代へ」と「自民党政治の変容 無党派層と

1970年代半ばの転換」である。これらの二つの論文を通じて、日本型多元主義が登場した背景については、ある程度の分析を加えていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1955年の保守合同から現在までの自民党の政治的イデオロギーとしての保守主義を、政治史の観点から分析することである。

中心的な分析対象は、革新自治体の台頭や国会での与野党伯仲にみられる「保守の危機」を背景として、学習院大学の香山健一教授や東京大学の佐藤誠三郎教授らによって唱えられた日本型多元主義に置かれる。それは、従来否定的に捉えられてきた日本の伝統的な集団主義を称揚するとともに、時代に即して刷新しようという考えであり、1977年の総裁予備選挙の導入を通じて自民党で支配的な地位を獲得し、1980年代の保守復調および行政改革を牽引した。また、日本的経営論などと共鳴しつつ、日本型福祉社会論、イコ社会論、新中間大衆論などを生み出した点でも重要である。

大きくいって、近代主義的保守主義から日本型多元主義を経て、新自由主義と新保守主義へと変遷してきた自民党の政治イデオロギーを、そのモデルとなった英米両国を含め、欧米諸国の保守政党との比較を交えながら分析する。それを通じて、戦後日本政治史および現代日本政治に関する新たな解釈を提示することが、本研究の目標である。

3. 研究の方法

本研究の最大の特色は、戦後日本政治史において重要でありながら、ほとんど学術研究の対象とならなかった自民党の政治イデオロギー、とりわけ日本型多元主義を学術研究の俎上に乗せ、分析することにある。従来は、研究者による分析であっても、それを支持する、もしくは批判するという問題意識が強く出すぎていたように思われる。そこで、学問的な手法に則った分析に努めることで、この研究分野を切り開くことを目的としてきた。

前述したように、ポピュリズムと呼ばれる政治現象の背景には、中間団体の喪失があるといわれる。日本の集団主義を称揚し、1980年代に大きな影響力を持った日本的多元主義とは何だったのか、なぜ衰退したのかを解明することは、学問的のみならず、社会的にも重要な意義があると考えている。

(a) 近代主義的保守主義の分析

日本型多元主義が1970年代に入って台頭するまで、自民党の正統なイデオロギーの座にあったのは、近代主義的な保守主義であった。それは、冷戦の下、社会党に対抗しつつ、

近代的な組織政党（大衆政党）を建設する党近代化の一環として、保守主義を確立しようとするものである。1960年の「保守主義の政治哲学要綱」が、その代表的な文書である。岸信介・福田赳夫と三木武夫・石田博英の二つの類型を対比しながら、その特質を明らかにする。また、そのモデルとなったイギリスの保守党をはじめ、同時代の欧米諸国の保守政党との比較分析を試みた。

(b)日本型多元主義の分析

本研究の中心は、日本型多元主義の分析である。その登場についての分析は、すでに発表したもので、第一に、参加の契機に基づく総裁予備選挙が導入された1970年代から、競争の契機を強める行政改革や教育改革が行われた1980年代への変容、第二に、日本型福祉社会論、イエ社会論、新中間大衆論など、多様な領域への広がりとその背景、第三に、行政改革や教育改革の内実とその限界という3点を主に分析し、日本型多元主義の全体像を明らかにした。日本的価値を称揚しながらも、総裁予備選挙や行政改革はアメリカをモデルとして導入・実施された。この時期の欧米諸国の保守政党との比較が、やはり有効であると考え、それも合わせて試みた。

(c)新自由主義と新保守主義の分析

1980年代末から、日本型多元主義は急速に後退し、それに代わって市場原理を重視する新自由主義が台頭した。それは、政治改革にも影響し、競争主義的な多数決原理に基づく小選挙区制が導入された。こうしたなかで自民党は、新自由主義を受容しながらも、それが従来からの支持基盤を掘り崩してしまうという矛盾を抱えた。そこで、家族・地域・国家など伝統的な価値を重視する新保守主義を掲げたが、日本型多元主義とは内容や機能など少なからぬ点で差異がある。そのことを具体的に明らかにするとともに、同時代の欧米諸国の保守政党との比較を行った。

本研究は、方法において、比較的オーソドックスである。最も重要な政治史的分析については、文書所蔵機関などを訪問し、『自由民主』や『りぶる』などの政党機関紙誌をはじめとして、一般紙、書籍、パンフレットなどの幅広い原資料を閲覧・複写し収集した。もしくは、原資料の所蔵者を訪問し、その許可を得て収集を行った。例えば、文書所蔵機関については、国立国会図書館憲政資料室、政策研究大学院大学など、個人としては、自民党の政治家やそれに協力した知識人などである。こうして収集した様々な資料の分析を主たる研究方法とした。

これとあわせて、政治史とはいっても、比較的近い過去であるため、関係者へのインタビューを幅広く行い、オーラル・ヒストリーの収集とその分析を積極的に行った。インタビューは、自民党を中心とした国会議員や党

本部の職員、政治家秘書、地方組織、派閥関係者、経団連やJAなどの友好団体、メディア関係者など可能な限り多くかつ幅広い対象に対して行った。こうして得られたインタビュー結果は、政治史的分析だけでなく現状分析でも活用した。

欧米諸国との比較においては、一次資料を用いた日本についての分析結果と、欧米諸国の保守政党についての主要な研究結果における事例やデータなどの二次資料を比較分析する形で行った。

4. 研究成果

最大の研究成果としては、二冊の単著を執筆し、出版したことである。

一つは、1955年の結党から現在に至る自民党の歴史を組織とイデオロギーの両面で論じた『自民党政治の変容』（図書）である。これは本研究課題の問題関心に直接的に沿うものであり、自民党が党近代化の時代から、日本型多元主義を経て、新自由主義と右傾化の時代へと変化していった経緯、およびその背景について詳細に分析したものである。概ね上記の研究目的や方法で記した仮説が機関紙誌や様々な資料によって裏付けられ、その実態を明らかにすることができた。目次は下記のとおりである。

はじめに

第一章 党近代化と小選挙区制導入の試み

- 一 岸信介と小選挙区法案の挫折
- 二 三木武夫と党近代化の失敗
- 三 田中角栄と小選挙区制の再挫折

第二章 総裁予備選挙の実現と日本型多元主義

- 一 三木・福田と総裁予備選挙の導入
- 二 香山健一と日本型多元主義の台頭
- 三 大平・中曽根と日本型多元主義の隆盛

第三章 政治改革と自社さ政権

- 一 小選挙区制の再浮上と小沢一郎
- 二 政治改革の実現と日本型多元主義の敗北
- 三 自社さ政権とリベラル派の優位

第四章 二大政党化と自民党の右傾化

- 一 リベラル派の凋落と「加藤の乱」
- 二 小泉純一郎と新自由主義的改革
- 三 安倍晋三と右傾化の進展

おわりに

もう一つは、自民党の現状について、派閥やポスト配分、政策決定、国政選挙、友好団体、地方組織といった側面から分析した『自民党「一強」の実像』（図書）である。この本では、イデオロギー分析にとどまらない、包括的な自民党に関する研究を行ったが、理念についても組織との関連で論じている。可能な限りの数量的なデータを集め、分析を

行ったほか、多数の自民党関係者にインタビューを行い、学問的な観点から客観的な分析に努めた。多くの新聞や雑誌で書評が書かれるなど、一定の評価をいただいたと考えている。目次は下記のとおりである。

- 第1章 派閥 弱体化する「党中党」
 - 1 衰退への道のり
 - 2 派閥とは何だったのか
 - 3 失われた機能
 - 4 残存する役割と上意下達機関化
- 第2章 総裁選挙とポスト配分 総裁権力の増大
 - 1 脱派閥化する総裁選出プロセス
 - 2 揺らぐ人事慣行
 - 3 ポストはどう配分されるのか
 - 4 強まる総裁の権力
- 第3章 政策決定プロセス 事前審査制と官邸主導
 - 1 事前審査制とは何か
 - 2 小泉政権という危機
 - 3 安倍政権の官邸主導
 - 4 事前審査制の持続力
- 第4章 国政選挙 伏在する二重構造
 - 1 減少しつつも優位にある固定票
 - 2 公明党との選挙協力
 - 3 公募による候補者選定
 - 4 二重構造化する国会議員
- 第5章 友好団体 減少する票とカネ
 - 1 団体における自民党の優位
 - 2 加入率の低下と影響力の後退
 - 3 データで見る友好団体の変化
 - 4 経団連と献金システム
- 第6章 地方組織と個人後援会 強さの源泉の行方
 - 1 強固な自民党の地域支配
 - 2 地域回帰への道
 - 3 末端組織としての個人後援会
 - 4 変わる国会議員と地方議員の関係
- 終章 自民党の現在 変化する組織と理念

そのほか、いくつかの論考を発表したが、なかでも「自民党の右傾化」(図書)は、なぜここ20年間、自民党が憲法改正案をはじめ右寄りのイデオロギーを採用するようになったのかという問いに対して、第一に有権者の右傾化仮説、第二に支持基盤での日本会議台頭仮説、第三に民主党との政党間競合仮説の三つを示した上で、第三の仮説を支持したものである。

また、「日本における保守政治の変容 小選挙区制の導入と自民党」(図書)は、イギリスやイタリアといった国々と比較しながら、政治改革後、自民党に代表される日本の保守政党がいかに変容したのかを論じたものである。

さらに、「衰退する『中道保守』 派閥政治の変容と終焉」(図書)は、自民党において中道保守的なイデオロギーが後退した

理由を分析し、それを派閥の衰退と変容との関係で論じたものである。

5. 主な発表論文等

〔図書〕(計5件)

中北浩爾, 中央公論新社, 『自民党 「一強」の実像』, 2017, 313

塚田穂高編, 筑摩書房, 『徹底検証 日本の右傾化』,(「自民党の右傾化」中北浩爾), 2017, 387 (88-107)

水島治郎編, 岩波書店, 『保守の比較政治学 欧州・日本の保守政党とポピュリズム』,(「日本における保守政治の変容 小選挙区制の導入と自民党」中北浩爾), 2016, 277 (245-272)

日本再建イニシアティブ編, 角川新書, 『「戦後保守」は終わったのか』,(「衰退する『中道保守』 派閥政治の変容と終焉」中北浩爾), 2015, 335 (75-115)

中北浩爾, NHK出版, 『自民党政治の変容』, 2014, 304

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~nakakita/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

中北 浩爾(NAKAKITA KOJI)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号: 30272412